

スウェーデン王国・デンマーク王国の性情報 および性教育事情覚書 (その 3)

— スウェーデン王国の性教育略史 —

佐 藤 年 明

Memorandum on Information of Sexuality and Education for Sexuality in Sweden and Denmark Vol. 3

Toshiaki SAROU

はじめに

1997年9月6日から18日までの、スウェーデン王国・デンマーク王国への私費渡航の際、主としてスウェーデン王国の性教育に関していくつかの文献資料を入手した。それらについては現在も翻訳・分析を継続中であるが、ここではその中から、スウェーデンの性教育の歴史を概括した下記の文献(英文)を翻訳・紹介したい。

これは、第2報でも言及した Sverige の代表的な性教育研究機関であるスウェーデン性教育協会(Riksförbundet för Sexuell Upplysning、略称 RFSU) から出版されている「性と生殖に関する報告」というシリーズ化されたパンフレットの第2冊目である(1995年刊)。著者の Lena Lennerhed は、このパンフレットの裏表紙に記載された紹介によると、Stockholm 大学の思想史の教師であり、博士論文「快楽の追求 1960年代スウェーデンの性論争」は1994年に公刊されている。彼女はスウェーデン性教育協会の評議会メンバーでもある。

学校における性教育——スウェーデンにおける論争の歴史的回顧

Lena Lennerhed

佐藤 年明 訳

(訳者注: 訳文中に〈 〉で挿入しているのは原文のページの変わり目である。)

序

学校カリキュラムにおける性(sexuality): それは不適切なのか? それは必要なのか?
あるいはそれは自明のことではないのか?

スウェーデンでは、学校における性教育の長い歴史がある。それがいかに、そしてなぜ発

展してきたかを述べるのがこの論文の目的である。性教育を導入するためにどのような議論がなされたのか？そしてそれに反対する人は何を言わねばならなかったか？

もう一つの目的は、性教育の内容とそれが時を経てどのように変わってきたかを述べることである。今日では、解剖学的・生理学的事実については人々はオープンに語る。若者の性は受け入れられており、教育は若者自身に、彼らの疑問に、そして個人の関係について議論したいという彼らの要求に基礎を置いている。過去においてはそうではなかった。

スウェーデンの性教育モデルを他国に移し替えることはほとんど不可能である。教育のこの場面にかかわりたいと考える国はすべて、その国自身の条件、伝統、最近の要求に基礎を置いたその国自身のモデルを見つけるべきである。しかし、お互いに学び合うこと、他国の経験を考慮に入れることもまた可能である。われわれはこの論文が何らかの新鮮な示唆を与え、議論ための刺激として役立つことを希望している。

目 次

開拓者	原文 P. 7 (訳文 P. 124)
性教育賛成論と反対論	原文 P. 10 (訳文 P. 125)
性教育が導入される	原文 P. 13 (訳文 P. 127)
用心深い出発	原文 P. 14 (訳文 P. 128)
今日の性教育	原文 P. 19 (訳文 P. 130)
スウェーデンの若者たちはどのように影響を受けてきたか？	原文 P. 25 (訳文 P. 133)
付録	原文 P. 26 (訳文 P. 134)
他の諸論文	原文 P. 28 (訳文 P. 135)

〈P. 7〉

開 拓 者

女の子のための保護、男の子にとっての危険

スウェーデンでは、学校における性教育は長い歴史を持っている。約 100 年前の 1897 年に、Karolina Widerström が十代後半の女子に対して当時の呼び方で「性の衛生学」(sexual hygiene) という授業を始めた。Widerström はスウェーデンで初めての女性医師だった。彼女の先駆的試みに続く他の医師や教師もいたが、この時期には性教育はまだ珍しいものであった。

この教育を受けたのが女子であり男子ではなかったのは、この教育が女子を保護するという形で役立たねばならないと信じられていたためである。女子は真の性的欲求を全く持たないと思われていたものであり、他方で男子はほとんどコントロールすることが不可能くらい強力な衝動を持っていると信じられていた。このような理由で男子はいかなる性教育も受けなかった。そのような教育は彼らの性的衝動を呼び覚ますだけであり、彼らは自分自身をコントロールすることが困難であると信じられていた。

もしも女子が適切な時期にどのようにして妊娠が起こるかやどのようにして性的伝染病が広がるかを知りたければ彼女たちはより適切に自分自身を守ることができると考えられていた。この方法では女子は自分自身のみならず男子の sexuality に対しても責任を負うことになる。

性的伝染病からの保護

Widerström が活動していた時期には、梅毒 (syphilis) や淋病 (gonorrhea) のよう

な性的伝染病が著しく蔓延していた。そして効果的な治療法はまだ全くなかった。多くの医師は学校に通う若い人たちを含めてすべての人たちがこうした病気に関する知識を獲得すべきであると考えていた。こうして〈P.8〉性的伝染病の大流行が学校において性教育を行なう理由となった。しかし問題は、どういう形態でそれを行なうかであった。ある人はこの教育はまず第一に性生活にかかわるリスク、たとえば病気に関する情報の提供のようなことに焦点を当てるべきだと信じていたが、他の人の意見ではもしも生徒が性生活に関する何らかの基礎的知識を持っていなければ効果的な教育を行なうことはできないのである。

この時期には性教育は概して慎重に扱われるべき事柄であり、子どもや若者に性について語ることは特に議論が分かれる事柄であった。

先駆者としての女性たち

1920年代から1930年代にかけてはスウェーデンの学校に性教育を導入すべきであると要求したのは主として女性たち——女医、女性議員、政治的女性団体、看護婦協会、女性教師——であった。スウェーデン性教育協会（RFSU）は1933年に設立された。それは Elise Ottesen-Jensen を指導者とし、その計画の第一の要点は性教育がこの国のすべての学校に導入され、1学年（7歳の子ども）から始められるべきであるという要求であった。

Elise Ottesen-Jensen

Elise Ottesen-Jensen（1886–1973年）は、RFSUの創立者の一人であり、最初の25年間この協会の会長であった。Ottesen-Jensen（Ottar という呼び名でも知られている）は、長い間スウェーデンのもっとも高名な性教育者であった。彼女は国中を旅行して老若男女と語り合い、彼女が来る会合はいつも大入りであった。

無知は広大だった。何らかの性教育を受けたことがあるスウェーデン人はほんのわずかであった。そのうえ1910年から1938年までは、避妊具に関する情報が広がることを禁ずる法律があった。

Ottar はこの法律と中絶を禁止する法律に激しく反対した。彼女は性に関する情報を広め、また個人に対するカウンセリングも行なった。なかんずく、彼女は女性にとっての隔壁（横隔膜？ diaphragms）について実験した。Ottar は多くの問題を引き起こしているのは無知そのものであるという見解を持っていた。女性たちは〈P.9〉避妊の知識を欠いていることによって起こるあまりに多くの、そしてあまりに頻繁な妊娠によって病気になり、精根尽き果ててしまうのである。人々は予防の知識を持たないために性的伝染病に感染する。無知と誤解は、彼らがそれは起こり得ないと信じているときに妊娠するということを意味する。少女たちは初潮をこわがる。なぜなら、誰もそれが起こると教えてくれなかったし、それは全く正常なことだと教えてくれなかったからである。マスターベーションをする少年は苦悶する。なぜなら、彼らはその結果病気になると信じているからである。Ottar の見解では、無知が個人と社会の両面における多くの問題の根源である。彼女が目当たりとした窮状に対する彼女の救済活動は、社会改革、法律上の変革、そして何より性教育の確実な実行を生み出した。そしてそのような教育は、Ottar が信ずるところでは、早期に——児童期に学校において始めなければならない。そうしてこそ効果的なのだ。人々は彼ら自身の失敗から学ばねばならないのではない。どうしたら妊娠するか、どうしたら病気が広がるかを、それがすでに起こってしまってから学ぶべきではない。

〈P.10〉

性教育賛成論と反対論

性教育が学校に導入されることが重要であると考えた人が多数存在した一方で、強く異を

唱えた人も多数存在した。反対陣営からはある聖職者が次のように断言した。

「性教育を導入しようと望む者は、肉欲の福音を説いている (preaching the gospel of the flesh)。性教育は若者の性的非文明化をもたらし、その結果利己心と歓楽が生じる。すべての高度な文明は生け贄を要求する。」

ある女医は次のように反論した。

「この牧師はポルノグラフィと啓蒙とを同一視している。性教育は若者を育てるものであり、相手の人間とその子孫に対する責任を強調する。性教育は新しい道徳を打ち立て、人々の中にある虚偽を一掃するだろう。真実のみが人々を自由にすることができる。」

性の問題は非常に論議を呼ぶものである。性生活とは通常は話題に上らせるものではなかった。少なくとも家庭という境界の外で語るべきものではなかったし、子どもたちのいるところではなおさらそうだった。論争は激烈で、おびただしい数の賛成論と反対論が出された。ここではもっとも一般的なものをいくつか紹介する。

学校での性教育に対する反対論

- ・性というものの場合は結婚の中にのみあるのだから、子どもたちや若者はいっさい性教育を受けるべきではない。
- ・子どもたちはまだ性的存在となっていないのだから、性教育を与えられるべきではない。彼らはこの問題がどういうものか理解するには幼すぎる。
- ・性とは大変慎重に扱うべき領域であるので、学校における課題として取り上げられるべきではない。性的な指導は、若者が親しい関係にある人からの心からの語りかけによってのみ与えられるべきである。〈P. 11〉生徒と教師の間にはそのような関係は存在しない。
- ・「寝た子を起こすな。」子どもたちと性について語ることは、彼らの性的衝動を早まって呼び覚ますことになる。そしてまた、これにより乱れた行為、望まない妊娠、病気、そして人々の感情生活の破壊がもたらされる可能性がある。
- ・生徒たちは学校での性教育を早期の性的デビューと乱れた行為への明確なきっかけと解釈するだろう。
- ・避妊について教えることは若者が妊娠や病気の危険を冒さずに性交をすることをより容易にする。そうすると、彼らにとって誘惑に抵抗することはよりむずかしくなるだろう。従って、避妊に関する情報は若者に与えられるべきものではない。

学校での性教育に対する賛成論

- ・すべての子どもたちは性差 (gender differences) について、そしてそれがどこから生じるのかについて人として疑問を持っている。だから彼らはこの疑問に対して誠実な解答を与えられるべきである。もしも大人がそれを避けたり、あるいは子どもたちが後から間違っていたとわかるような答を受け取ったとすると、若者は大人を信頼しなくなってしまうだろう。子どもたちが性生活とは何か話題にするのを許されないようなことなのだと気づいたとき、それは彼らにとって何か不快でいやらしいこととなってしまいうだろう。
- ・小さい子どもたちは性生活を恥ずかしがったり臆病になったりして見てはいない。もしも彼らが早期に知識を獲得すれば、彼らが性生活に対して自然な、リラックスした責任ある態度を発達させる機会を増やすことになるだろう。
- ・両親は彼らの子どもたちに性生活について語らなければならない。もちろんこれは望ましいことである。しかし両親はしばしば知識を欠いており当惑している。そしてその結果情報は提供されない。従って学校が情報を利用できるようにしなければならない。学校が与える教育は代用品ではなくむしろ他を補って完全にするものでなければならない。

もしも両親と学校が性教育の責任を果たさなければ、子どもたちと若者たちは他の手段で——間違った情報を与えかねない友人や仲間から、あるいはポルノグラフィーから——知識を得るだろう。

〈P. 12〉

- ・「子」はいずれにせよ寝てはいない。若者は彼らなりの性的衝動や感情を持っている。もしそれが拒絶されると彼らに不幸が降りかかる危険がある。対照的に性教育は彼らを保護する。大人が若者に節制と抑制を要求しても彼らはいずれにせよ性交渉を持つだろう。教育によって彼らはいかにして望まない妊娠や性的伝染病を避けるかを学ぶだろう。そしてまだ性的な面で活動的でないものは性生活への備えを得るだろう。彼らは知識を得て性生活について語り合ったり自分自身で熟考する機会を与えられるだろう。このようにして責任ある行動が促進されるだろう。
- ・性教育は生徒が責任ある作法で行動することを助け、彼らが思慮なく衝動的に行動するのではなく自らの行動について熟慮することを助けることができる。
- ・もしも若者が必要な情報を受け取らなければ、望まない妊娠と性的伝染病の頻度は上昇するだろう。知識は分別と思慮のある行動を促進する。

上記のことが議論された際のジレンマは次のことであった。性教育は生活の乱れをもたらし、若者の思考を性に焦点づけ、あまつさえ歯止めなしに自らの性的衝動を遂行するよう鼓舞するものと見なされるであろうか？それとも性教育は若者にとってある種の保護の機能を果たし、そしてさらに彼らの生活を責任ある作法で遂行する機会を与えるのだろうか？やがて優勢になっていったのは後者の方向であった。

〈P. 13〉

性教育が導入される

1940年代に多くのスウェーデンの学校に性教育が導入された。子どもたちや若者たちと性生活について話すことはもはやそれほど論争的ではなくなった。今や多くの人々が性教育が必要であることに同意した。しかし、政治家、教師、医師その他の人々の間では、性教育が何を含みべきでありどのように指導されるべきかについて、何ら一般的な合意はできていなかった。これらの論点は1940年代において激しい論争の課題となった。

議論は性の教育がどの教科領域において与えられるべきかについて、この仕事のためには正規の教師がもっとも適しているのか、それともこれは学校医の責任なのかについて、男子と女子はいっしょに教えられるべきか分けられるべきかについて行なわれた。これらの疑問については異なる意見が存在した。しかし本来実践的なものなのでそれらの意見はそれほど持続的なものではなかった。しかし次の1つの論点は倫理的立場と関連している——すなわち、学校は出発点として伝統的規範と価値を採用すべきか、それとも異論に対して関心が示されるべきかである。スウェーデンの人々の圧倒的多数は結婚前にセックスをしていたし、従って多くの人々は学校がこのことを受け入れるべきだというのが正当なことではないのかどうかを自問した。

性教育——中庸をとる

論争は生物学的および倫理的な方向の両方を持っていた。生物学的方向の主唱者は、解剖学的および生理学的事実が教授の核を構成するべきだと主張した。対照的に、倫理的方向の代表者たちは規範としつけが中心的な論点であると考えた。学校が提供することになった教育は最終的にはこの二つの間のどこかに落ち着いた。そしてそれは中庸を行くものと見なすことができる。

〈P. 14〉

用心深い出発

年少の子どもたち

1940年代から先の25年間、スウェーデンの性教育はおおよそ同じ状態にとどまっていた。年少の子どもたちは性差についてと子どもはどこから来るのかについての知識を得たが、それは一般的な用語によってであり、また解剖学的な詳細を欠いたものであった。女の子には「割れ目」があること、男の子にはペニスがあることは話題になったが、性交にはほとんど触れられることがなかった。子どもたちは、「おかあさんの卵がお父さんの種と結びつきます」と教えられたが、しかしもしも彼らがこのことがどのようにして起こるのかを知りたいと思えば、先生に尋ねる必要があった。そして先生が喜んで答えてくれるかどうかは全く保証の限りではなかった。教えることは養育やしつけの一形態であるということは自明であると思われていた。なかんずく、子どもたちは家庭と家族を持つこと、そして両親を尊敬することの大切さを学ばなければならなかった。

年長の子どもたち

子どもたちが年長になるにつれて、教えることもより広範囲になった。11歳から13歳の子どもたちは性器の形成についてより詳細な情報を与えられたし、また思春期における男女の身体の変化について教えられた。14歳およびそれ以上の子どもたちは解剖学および生理学についてはさらに深く教えられた。彼らはまた避妊、性的伝染病、中絶についての情報を得た。倫理的要素、すなわち規則や規範が以前よりはるかに大きな機会を与えられた。倫理学の任務は、養育と規範設定を通じて大人の生活と親となることに向けて若者を準備することであった。

〈P. 15〉

男女共学か性差別か

性教育はかつて一度もそれ自体で独立した教科であったことはなく、他の教科、主に生物学、社会科、宗教に含まれていた。従って性は、いくつかの異なる角度から—医学的、社会的、倫理的に—扱われることになった。

男子と女子は同じ教育を受けた。若者は彼ら自身の体の発達と変化についてのみならず異性のそれについても学ばねばならないという考え方があった。たとえば、男子もまた月経とは何かについて学ばねばならない。異性についての知識を得ることはまた、生徒がいつの日か親となり、彼ら自身の子どもの教育者となる必要があるという理由からも重要であると見なされた。しかし、男子と女子はいっしょに教えられるべきなのかそれとも別々のグループで教えられるべきなのか？このことについては様々な意見があった。ある見解では、この舞台での男女共学は少年少女がお互いについてより大きな理解を得ることを意味する。他の人たちは、もしもクラスが性別に分けられていれば討論はよりオープンで遠大なものになるだろうという見解を持っていた。教師たち自身は彼らが何を最良と考えるかを決定することを許されていた。

若者に抑制を教える

若者は、性的節制こそ彼らが大人になるまでにたどるべき唯一の正しい道であると教えられた。性生活を早く始めることはリスクと結びつけられた。つまり、性的伝染病、あるいは、女子の場合妊娠のリスクと。若者はまた非常に単純に、彼らは性生活に十分なほど成熟していないのだと教えられた。愛が持続し、パートナーたちが子どもの世話をするのに十分な年齢に達している場合にのみ、性的関係を持つことは正しいのだとされた。

また若者は大人になるまでは性的に節制したままであるべきだと主張された。一方で、彼らが性生活を始める前に結婚すべきであるとは主張されなかった。このことは婚外性交渉を罪と考える多くのクリスチャンを刺激した。

空想的な女の子たちと物質的な男の子たち

性についてのものの見方は1940年代以来急激に変化してきた。とりわけ女子に関してはそうである。若者たちは彼らへの性教育において、青年男子は女子よりも強い性的衝動を持っていること、〈P.16〉そして男子が性交することに同意させるために女子を獲得しようとする試みことは自然なことだということを教えられた。女子の衝動は性的表現には焦点づけられておらず、より「空想的」なものであった。従って、彼女たちが自分自身のためにも男の子のためにも「いやと言う」べきだということは当然視されていた。

多すぎず、少なすぎず

1940年代および1950年代に続けられていた性教育は、今日では——少なくとも最近のスウェーデンの標準からみれば——やや不安に駆られた状態だったと思われる。性的なことについて話すことは重要であり緊急のことだと見なされていたが、何を取り上げるべきかについては明確な限界があった。それはまるで特定の事実が若者をして「まちがった方向へと思考させる」か、もしくは彼らを驚かせるに違いないかのようであった。子どもたちや若者たちは、もしも2人の成熟した人たちが互いに愛し合うならば性生活とは自然なものでありまた美しいものだと思われた。しかし、教育が重大なポイント——すなわち性交——に到達するやいなや、それはごまかしの不明瞭なものとなった。年長の子どもたちは何らかの情報を与えられたが、直截な用語で教えられることはまれだった。性的衝動は豊かであり危険でもある力と見なされていたことは明らかである。

同じく当時において普遍的な考え方であったのは、若い人たちは性生活に関して「自然なはにかみ」を持っているということだった。このはにかみはよいものと見なされた。なぜならそれは若者がそれをするにはまだ十分成熟していないようなことをしてしまうのを防ぐからである。性教育は事実を伝えるべきではあるが、この基礎にあるはにかみに対しては挑戦すべきではない。

このようにして、教育は一種の均衡を取る行為となった。一方において、あまりにもわずかな情報やあまりにも覆い隠された間接的な情報を与えないということが重要であった。なぜならもしそうにすると若者は彼らが本当に必要としている知識を獲得できないからである。他方で、若者はあまりに多くの情報を与えられるべきではない。なぜなら、もしそうになると彼らは性的なことがらについてより多大な関心を払うようになり、また時期尚早の性的関係を始めてしまうであろうから。

性教育がかつて行なったような形態をとったのは、次のような全く異なる二つの立場を調停しようと試みたためである。一つは倫理的に方向づけられた家族の知識への要求であり、もうひとつは自然科学に方向づけられた教育であって、そこでは事実（すべての事実）が提示される。

〈P.17〉

教師の訓練

1940年代における学校への性教育の導入は多くの意味で革命的であった。理想としてはすべての子どもたちがこの教育を受けるべきであったが、実際にはそれは時には実行困難であった。多くの教師たちはこの任務に直面したとき不確かなものを感じた。それは彼らが適切な知識を欠いているからであるか、または彼らが生徒の前で性について語ることがどぎまぎするものであるとわかったからであるかのどちらかだった。彼らの任務のこの部分に関し

ては教師養成の中ではほとんど全く触れられなかったもので、教師たちは他のところから知識を得なければならなかった。その中には RFSU 会長 Elise Ottesen-Jensen が運営するコースもあった。彼女は何年にもわたって幾千もの教師たちを訓練した。

性教育が必修となる

誰もがその教授に、その指導のしかたやそれに含まれるものに、満足したわけではなかった。しかしその導入によってこそもっとも進歩がもたらされたということは合意された。1955 年には学校における性教育は必修となった。それは教科領域において教授することが義務づけられたことを意味する。この決定はスウェーデンではほとんど関心を引かなかった。しかし海外では関心を引いた。世界中からジャーナリスト、政治家、研究者たちが彼らが非常に革命的な前進であると見なしたことを研究するためにスウェーデンへやってきた。多くの人々はぞっとした。スウェーデン人たちが道徳の名の下にすべてのことを傷つけていると見なしたからである。他の人々はスウェーデンの政策は分別あるもので、見習うべき事例であると見なした。

変化の要求

1960 年代は大変動期であった。また再びスウェーデンの学校における性教育が議論的になった。今や主たる批判者はとりわけ若者たちであった。彼らは教授があまりにも消極的すぎるという見解を持っていた。若者は 10 代に性交を行なうことについて警告されていた。彼らは病氣と望まない妊娠について警告されていた。そして、最大の問題として、女子は男子について警告されていた。避妊具に言及されるときも、またしても警告の調子であった。つまりそれは信用できないというのである。性生活とは積極的で〈P. 18〉愉快なものであり、喜びと親密さの源であるということは、若者によればどういふわけか見失われてしまったことなのである。

したがって学校は生徒の生活に対してあまりにも干渉しすぎると批判された。教授指針によると、教師は生徒を育て、個人の人間関係に適用される規則を教えるべきである。彼らはまた生徒たちが性的に積極的になったときには仲裁し、妊娠した女生徒を停学にしなければならない。これは多くの若者が拒否することであった。彼らの見解では若い人の性生活は私的なことからである。学校の主な任務は事実を伝えることであって、子どもをいかなる特定のやり方で育てることでもない。

この批判は学校における性教育の根本的再検討を促した。時が過ぎるにつれ、新しい指針が開発され、教育の内容は、少なくとも部分的には修正された。

〈P. 19〉

今日の性教育

性教育はそれが最初に導入された 50 年前以来大きな変化を被ってきた。最も重要な相違点は以下の通りである。

事実に関する開放性

今日、解剖学および生理学的事実は全くオープンに語られる。過去の性の教授を特徴づけていた不安は、全く消え失せた。性交の行為は婉曲語法抜きに叙述される。さらに、性欲やオーガズムという過去には決して触れられなかった主題に関する教授が行なわれている。マスターベーションやペッティングは正常なものとして扱われ、コースの中で取り上げられている。

教授の一つの基礎は知識とは決して有害ではないということ、知識自体は決して悪いもの

ではないということである。反対に、それは個人が彼ら自身の生活をコントロールするより大きな機会を与えるのである。性交についておよびそれがどのように起こるかについて話すということは誰かにセックスをすることをそそのかすことと同じではない。彼／彼女の性的デビューをいつにするかは個人が決めることである。しかしそれよりもずっと前に彼または彼女は、このことが何を意味するかを知り、したがって望まない妊娠や性的伝染病から守られなければならない。

性それ自体の価値

性的快楽は今日それ自体価値あるものと見なされている。古い性教育においては、性的関係を持つこと（sexual partnership）は結婚もしくは愛と結びついているときにのみ正しいと主張された。性とは愛の交わり（love communion）の表現であると見なされていた。今日では性生活はそれ自体の価値を持っているという見解が広まっている。性的〈P. 20〉快楽は特定の理想や子どもがほしいという願いと結びつけられる必要はなく、それ自体で正当なのである。

しかし学校はまた人々が持続する感情的により深い関係を結ぶような性的結びつき（sexual association）は一時的な性的触れあい（sexual contact）よりも価値があると主張する。いきがかりのセックスは、無差別あるいは無責任であると宣告されるわけではないが、励まされることもない。学校はいきがかりの性的関係に対しては少しあいまいな態度をとっている。

若者の性の受容

性教育はもはや若者の側の節制を主張しはしない。反対に、若者が互いに性的関係を持つに違いないということが自然で自明なことと見なされている。若者の性は今日受容されており、そしてこのことが学校における性教育が大変重要である理由である。若者は知識を獲得し、そしてまた性生活について話し合う機会を与えられ、彼ら自身が自分の人生をどのように生きたいかを熟考する。性教育では性的デビューの機会はそれぞれの人が個人的に選択することがらであると教えらる。性交は禁止されるべきものでもないし、個人がむりやりに引きずり込まれるとを感じるようなものであってもいけない。

若者の性の受容とは、教授が過去にそうだったように大人の性ではなくて、主として若者の性に焦点づけられるべきだということを意味する。学校における討論は若者の疑問や今の時の彼ら自身についての思考／反省に関係する。

女性の性

少女と女性の性に関する見方はスウェーデンの学校への性教育の導入以来相当に変化してきた。以前には、少女たちは性的存在であるというよりは空想的であると述べられてきたし、一方で成熟した女性たちは主として子どもの産み手および母親としての役割という見地から語られた。

今日の性教育では基本的出発点は誰もが、少女も少年も、女性も男性も同様に、性的要求と感情を持っているということである。

〈P. 21〉

ホモセクシュアルへの関心

性教育においてはホモセクシュアリティに対してに関心が払われねばならない。多くの若者はホモセクシュアリティをめぐる論点について疑問を持っており、またじっくり考えようとしている。すなわち、ホモセクシュアリティは何に起因するのか？それは普遍的なものか？人はホモセクシュアルとしてどのように生きているのか？私自身はホモセクシュア

ルなのか？ このような理由でホモセクシュアリティについて話し合うことは重要である。学校の任務には偏見を拒否することやますますの寛容さを促進することを試みるということも含まれる。ホモセクシュアルの愛はヘテロセクシュアル同士の愛と同等の価値を持つと見なされる。かつてと比較すると、はるかに大きな相違がある——ホモセクシュアルは以前には病気であり、不運なことであり、危険でさえあると見なされてきた。

障害者の性生活に対する権利

今日のスウェーデンの学校における性教育は、誰もが性生活の権利があるし、このことは障害者を含んでいるという考え方に基礎を置いている。スウェーデンの学校には、もちろん身体運動、視覚、聴覚に関するさまざまな種類の損傷を持つ生徒たちがいる。学校は障害を持つ生徒が彼らが排除されることなく彼らが参加者であるような性教育を受けることを保障する義務がある。教育は障害者がそうでない人と同様に性生活の権利を持っているという点を強調する必要がある。障害のある生徒もまた教育福祉職員や医師の個人的なカウンセリングセッションの機会を与えられなければならない。

会 話

性教育はますます、教師と生徒の間の、また生徒たち自身の間の会話の形を取りつつある。伝統的様式においては解剖学や生理学に関するもののような事実に向づけられた諸段階が生じているが、個人の関係について言えば、それは議論すべき問題である。その考え方とはつまり、それぞれの個人は彼ないし彼女が生きたいと思うやり方に向かって働くべきであり、彼ないし彼女にとって何が正しいのかを発見すべきだというものである。そしてこのことは、主として他の人と話すことを通じて達成される。会話の間に疑問を提起することができ、考え方を検証することができる。若者は援助を受けるが、またときには反駁され、さらにものごとを考え抜くことを強いられる。会話は〈P. 22〉自我形成 (identity formation)、自分が誰であるか、自分が何を考えているかを発見する方法を確立する助けとなる。

今日においても、学校は子どもたちを養育する役割を果たす義務を負っているが、これが意味することやこれがどのように遂行されるかは大きく変わってしまった。古い性教育においては、学校が適用される規則や規範を制定した。今日では禁止を課して服従を要求することは効果的でもないし道徳的にも正しくないと見なされている。基本的な考え方は若者に教え込むべき唯一の正しい生活のしかたがあるというものではもはやない。それとは対照的に、根本的出発点は、人々はそれぞれ異なっているということ、彼らは異なる規範、理想、価値観を持っているということ、そして彼らは自分自身が個人的に最良であるとわかったやり方で生きる権利を持っているということである。それぞれの個人の生活は可能な最大限度まで個人的なスタンスを取ったことの結果であるべきである。そしてその機会、個人間の関係について話すことを通じて生み出されるのだ。

学校は多元主義とそれに伴う生活様式と価値観の豊富な多様性の主唱者である。しかしこのことは、すべてのことが同等の価値を持つと見なされるということの意味するわけではない。学校はまた達成すべき独自の目標、それに向けて活動すべき一定の価値や理想を持っている。たとえば学校は伝統的な性役割に反対し、広がる男女の平等を支持するよう努めなければならない。学校はまた他の文化的視点に対してますます寛大になること、とりわけますますホモセクシュアリティを尊重することを支持しなければならない。当然のこととして学校はあらゆる形態の性的強制、暴行に反対して行動しなければならない。いかなる種類の性的関係形成 (sexual associations) も、自発的なものでなければならない。

教師の新しい役割

権威を振り回す教授がますます会話と置き換えられてくる中で教師の役割も変わってきた。

以前は教師は単純にある不動のあらかじめ決められた情報を中継してただけであり、彼ないし彼女はお手本となる授業についていくためにそれを丸写しにしてさえいたのである。今日、教師はむしろ一種の集団的会話の指導者であり、さまざまな観点を提示するという任務を持っている。教師は自由に使えるさまざまな関連教材を持っており、それらを利用する上で役に立てる。いまだに性科学と〈P.23〉性教育の役に立つ方法は、教師養成において比較的少量しか利用されていない。

教師は多くの責任を背負っており、彼らの仕事はいつも容易なものであるわけではない。今日においてさえ、性教育はある学校では散発的に行なわれているに過ぎない。一方で別の学校では性教育は十分に展開され、持続的に追究されているが。

要 約

学校における性教育は、最初に導入されて以来大きな変化を経験してきた。今日では、性教育はその出発点を若者自身に、彼らの疑問や彼ら自身が気にしている問題、そして彼ら自身のセクシュアリティににおいている。若者が性的関係を持つことは受容されている。性的な欲求や享楽（sexual desire and enjoyment）はそれ自体積極的なものと見なされている。セクシュアリティはそれ自体価値を持つものと見なされ、結婚とか恋という枠組みの中にあるべきものと要求されてはいない。自由な性的関係もまた受け入れられている。しかし、より恒久的な交際の方がもっと大きな価値を持つものと見なされている。

学校はもはや子育てにおいて以前持っていたような役割を持っておらず、個人のアイデンティティ形成の援助の役割をより多く果たしている。個人の人間関係をめぐる諸問題について話し合うことが中心になる。当然ながら、生徒が例えば生殖（reproduction）とか性的伝染病のような純粋な事実知識を受け取ることは重要である。しかし、恋や夢中になることやセクシュアリティについて、男の子はどんなもので女の子はどんなものか、何が正しくて何がまちがっているかについて会話するように持っていくことも同じように重要である。

新しい問題

HIV・エイズ問題はスウェーデンの学校における性教育に影響を与えただろうか？おそろく与えただろう。しかも様々な方法で。HIV・エイズ問題は、若者に性教育を与えることがより一層重要になったこと、つまり単純な話だが、それを怠ることができなくなったことを意味している。社会のあらゆるグループは、HIV・エイズウィルスについて、それがどのように伝染するかについて、そしてどのような防御策が利用可能かについての情報を与えられねばならない。このことについては実質的に合意されている。

スウェーデンの性教育の基本的テーマは常に、セクシュアリティは全体の中で、文脈の中で見られなければならないということであった。〈p.24〉今日では広がり続けているHIV・エイズの予防に大きな重点が置かれている。おそらくこのことによってセクシュアリティの多くの諸側面が教育においてはより少ない機会しか与えられないという状況を招いている。

〈P.25〉

スウェーデンの若者はどのように影響を受けてきたか？

スウェーデンの若者は相当の知識を持っている。男の子も女の子も性について、個人の人間関係における問題について、どうしたら妊娠するかについて、どうしたら避妊できるかについて、そして性的伝染病がどのように広がるかについて多くのことを知っている。もしも若い女の子が望まない妊娠をしたとしたら、あるいはもしも若者が性的伝染病にかかったとしたら、それが無知によるものである場合はほとんどない。概して、そこには他の原因があるものである。

まさにこの理由によって、スウェーデンでは10代の妊娠はとりたてて多いわけではない。確かに性的伝染病は若者の中で広がっているが、これまでのところ HIV・エイズに感染したスウェーデンの若者はごくわずかである。

性生活についてスウェーデンの若者が持っている詳細な知識はいろいろな出所から来ている。すなわち、両親から、ユース・クリニックから、本から、新聞から、等々。にもかかわらず、その大部分は学校での性教育から得られたものである。

今日のスウェーデンにおいて性教育に従事する者はスウェーデンの若者の大部分は責任ある人々であり、また彼らは獲得した知識によってそうになっているのだという見解を持っている。性教育と個人の人間関係について語り合うことは、若者に必要な諸事実を与えてきたのみならず、性生活をうまくやっていく——そこに含まれるあらゆる苦悩、要求、欲望、感情とうまくつきあっていく——覚悟と能力を彼らに与えてきたのである。

〈P. 26〉

付 録

この付録は、中央学校委員会と文部省によって制定（1977 年から適用）されたスウェーデンにおける性教育の基礎にある基本的価値の簡略版からなっている。

（訳者註：下線部は原文のイタリック体部分）

1. 「人間の固有の価値への敬意を育てること」という学校の任務は、他の人々のことに配慮することへの要求と、人生の全ての舞台で適用される個人の行動への責任に対する要求が、性と個人の人間関係に関する教育の領域で奨励されねばならないことを意味する。まず第一に、これは誰も他の人間を彼もしくは彼女自身の関心や要求を満たすための単なる手段として扱うことを許されないということの意味し…。望まない妊娠の原因となることは性的な場面での責任と熟慮の欠如のよく見られる形態である。もしも子どもが歓迎されておらず、その子の親たちがその子を世話するのに十分なほど成熟していなければ、これは親たちばかりでなくその子にとっても問題である…。
2. 「人間生活の不可侵性と、関連して個人の保全の権利への敬意を育てること」という学校の任務は、個人の人間関係の教育に多くを負っている。いかなる形の心理的圧迫も、肉体的暴行と同様に、（個人の）保全に対する犯罪である。
3. 個人の保全に関連して、性および個人の人間関係の分野の教育を特徴づけるべき次のようなもっとも基礎的な価値の一つがある。：個人の結合の一部をなす性生活は非個人的で気まぐれな性生活よりも得るところが多く、従って育てる価値がある。

〈P. 27〉

4. スウェーデンの人々の大多数に強く支持されている価値は、夫婦間・婚約者同士・親密な関係のパートナー同士における貞節の要求の中に反映している。
5. 関連する基本的価値——個人の保全の権利の——は、概してポルノグラフィにあらわれているような人間に対する見方を拒否することを意味する。
6. 民主主義と平等な権利の原理を支持し強化できる生徒の性質に対して基礎を提供するだけでなくそれを育てるという学校の任務はまた目的を持った、価値に方向づけられた教授に関係している。この原理は例えば、男性ならとがめられないような同じ行動の場面で女性が社会的に拒否されるという、性的場面での伝統的な二重倫理に抵抗する際に適用される。
7. 二重倫理を拒否することは、伝統的性役割（すなわち両性間の平等の促進への反作用となる男性と女性への烙印）を打破するという任務の一部分である。
8. 平等な権利への要求はまた両性間の関係について人種差別があってはならないということをも意味している。

9. ホモセクシュアルへの差別はここ数十年の間に下火になってきた。性と個人の人間関係の場面における教育は、この傾向の持続を促進すべきである。
10. 性教育は、精神的に傷ついた人、精神的に病んでいる人、監獄や他の拘束機関の収容者の性的パートナーシップの権利の承認を強化することに貢献すべきである。老人の性的パートナーシップへの偏見は打破されるべきである。
11. 個人の人間関係に関わる論争課題に対する若者たちの見通しに関しては、寛容さを育てるという学校の任務が重要である。

〈P. 28〉

他の諸論文

スウェーデン性教育協会（RFSU）が出版した「性と生殖に関する報告」シリーズの諸論文は以下の通り：

- No. 1：1995、青年男子に対する性教育、Erik Centerwall
- No. 2：1995、学校における性教育—スウェーデンにおける論争の歴史的回顧、Lena Lennerhed
- No. 3：1995、レッドカードかイエローカードか？—あなたはまだゲームをしますか？
タンザニアで若者として性的および生殖上の健康（sexual and reproductive health）
とうまくつきあっていくこと、Minou Fuglesang
- No. 4：1995、カイロ会議（ICPD 1994）における性的および生殖上の健康および権利、
Katarina Lindahl

おわりに

本稿では、Lennerhed 論文の訳出・紹介にとどまった。

スウェーデンの性教育史については、稀少ではあるが日本における先行研究も存在するので、それらを含めての検討を次稿において行ないたい。

（1998年10月20日）